

# 研究者におすすめの手抜き子育て



本 仲 純 子

私が日本分析化学会の会員になった頃、女性会員は非常に少なく、徳島大学工学部においては更に少ないために、孤軍奮闘せざるを得ない状態でした。現在では考えられないかもしれませんが、学部内に女性用トイレも無い状況でした。留学、結婚、出産もままならない雰囲気の中で、遅く生まれた一人娘が、今年結婚することになりました。出産前に子供の育て方について、いろいろな角度から検討しましたが、やはり一番大きな要因は研究と養育との兼ね合いでした。

就職して間もない頃、女性としての悩みから、文学者の芹沢光治良先生（「巴里に死す」でノーベル賞候補になる。第5代日本ペンクラブ会長）に胸の内を打ち明ける機会がありました。先生がフランスに留学されている時にキュリー夫人とよく話をされ、ある時こんな質問をされたそうです。「子供を立派に育てていらっしゃると思いますが、研究する事と子供を育てる事をどのように考えていらっしゃるでしょうか」「子供を育てる事と研究する事は同じ次元で考えています。良い研究をすることは社会への奉仕ですが、社会のためになるような人間を育てることも社会への奉仕だと考えています」。芹沢先生は「日本も必ずフランスのように、女性が働きやすく子供も育てやすい時代になりますよ」と励ましてくださいました。

生まれたばかりの子供にとっては全てのことが初めての経験です。そのファーストタイムで手を抜かず丁寧に手をかけると、一番手抜きができることに気がきました。幼少期ほど行動の把握が容易で観察しやすく、本質的な性質も見抜けます。成長とともに行動範囲は広がり全てを把握することはできなくなりますが、本質的な部分は変わらないものです。そこで一番観察しやすいファーストタイムを逃さず、手抜きをせずに育てることが一番の手抜き教育になると考えました。夫や義理の母の協力のもと、私は研究を続けられ留学も家族一緒に行かれたことは、とても幸せなことでした。

女性研究者が途中で志を断念せざるを得ない原因の多くは、結婚による家事や育児の負担が大きいと考えられます。しかも子供は育てば良いだけではありません。人間の能力は無限であり、子供にとっては、その能力に気付かれず、いい加減な育てられ方をされては迷惑な話です。

定年退職後、徳島大学が文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業に採択され、「徳島大学AWAサポートセンター」センター長として3年近く勤務させていただきました。ここでは、研究や結婚・育児に悩む女性研究者に、自分の経験を通して様々な助言をさせていただきました。女性にとって働きやすい社会の仕組み改善は、今の日本には不可欠なものです。

子供は神からの授かりもので、成人すれば社会にかえすもの、それもできるだけ良い条件で社会に返すことが、我々に課せられた後世への役目であると考えています。

[Junko MOTONAKA, 前徳島大学大学院教授, 日本分析化学会中国四国支部参与]